

能代市助役なども務めた坂本定徳。渡辺さんは後年、「そんな私を一番理解してくれたのは坂本校長。直木賞受賞後、真っ先にお礼に行かなければならない人だった」と述べています。

■悲しみを乗り越えて

昭和6年、女学校を卒業すると、花嫁修業のため上京します。この頃はまだ作家になろうなどとは思っていませんでした。同10年、画学生だった渡辺茂と結婚し夫の故郷広島で暮らすことになりましたが、幸せは長く続かず、再上京後の同14年、25歳の時に夫を病気で失います。

悲しみは深く、軍靴の響きが徐々に高まる東京で生活のため懸命に働く傍ら、亡き夫への思いや周辺のことなどを原稿用紙に綴りました。この作品が処女作「いのちのあとさき」として出版され、作家への転機となります。

昭和46年には、夭折の天才画家・青木繁の生涯を描いた小説「海の幸」を発表していますが、画家を目指しながら亡くなった夫を重ね合わせている、ともいわれています。



直木賞受賞後、「馬淵川」の登場人物のモデルとなった園分ハルさんを訪ねて(昭和34年、岩手県福岡町)

昭和19年、空襲の激しくなった東京から母のふるさと岩手の福岡に疎開し、「馬淵川」を執筆します。終戦後、再び上京すると書き上げた草稿は、タンスに大切にしまい

著作は、「馬淵川」や「啄木の妻」「万灯火」のように、波乱の生涯を送った北国の女性を主人公とした作品が多く、女の哀歓と時代の荒波の中を力強く生き抜く姿を描いています。

また、鷹巣での少女時代の記憶を詩情豊かに描いた「みちのく子供風土記」に見られるように、郷土に対して深い愛着を抱いていました。

渡辺さんは、旧鷹巣町がふるさと文化運動の拠点として、「みちのく子供風土記館」を建設した際には多額の寄付を寄せています。また、新人作家の登竜門となつている「さきがけ文学賞」も渡辺さんの寄付を基金の一部として創設されたものです。

■舞台・ドラマにも

ドラマ・演劇として脚色された作品も多く、「馬淵川」「白と紫」「原生花園」「海の幸」はテレビドラマとして放映され、「啄木の妻」や「みちのく子供風土記」「タンタラスの虹」は舞台化されました。「馬淵川」「海の幸」は、森繁久彌のライフワークであったラジオ番組NHK日曜名作座でも取り上げられています。



著作の一部(鷹巣図書館)

このうち「みちのく子供風土記」は、平成3年に劇団文化座と地元・たかのす劇団によって舞台化され、現在の市文化会館で、多くの市民も出演し上演されました。なお、昭和59年には桜田淳子主演により映画化も試みられ、市内各所で撮影も行われましたが



テレビドラマや舞台になった作品も多い。昭和59年には「みちのく子供風土記」の映画化が企画され、市内各所でロケが行われました。(旧鷹巣南中学校での運動会のシーン/宮野明義さん撮影によるスチール写真)

同人誌の編集などを手伝いながら、創作活動を続けます。昭和24年、多くの作家が育つた文芸誌「三田文学」の同人になります。そこにいた柴田連三郎や遠藤周作などと交流を始めたのもこの年でした。同年、木下利秀と再婚。この頃になると紙も出回り始めて出版事情も良くなり、著述生活も軌道に乗るようになりました。直木賞受賞までの期間、「明日」「女性改造」などいくつもの同人誌に小説を発表、作家としての基礎を固めます。

■徹底した取材をもとに作品を執筆

直木賞受賞後も、特に気負うこともなく、題材について時間をかけて綿密な取材を重ね徹底的に調べ上げる執筆スタイルを貫きました。生涯で刊行された小説は15作、エッセイが5作となっています。

資金不足などの事情で未完に終わっています。

■秋田の愛の物語に光

海外に題材を求めた作品もあります。日系ハワイ移民の苦難の歴史や生活を描いた「ブルメリアの木陰に」「タンタラスの虹」「風に咲くプアマレ」の3部作がそれです。

ハワイでの取材中、後に「秋田の赤い靴」として知られることになる小さな記事を見つけます。そこには、明治中期、秋田に滞在した宣教師カラ・ジェムス・ハリソン女史と、婦人刑務所の死刑囚の子として生まれ、ハリソンに命を救われた金子ハツとの実話が紹介されていました。

渡辺さんは、秋田での二人のことを調べ上げ、母子愛の物語として「タンタラスの虹」の中に収めました。秋田市の明德館前には、県内の女性団体などによって二人のブロンズ像が建てられています。

【主な著作】

- 「いのちのあとさき」(処女作 S17) / 「末の松山」(S23) / 「馬淵川」(S34) / 「地蔵流し」 / 「白と紫」(S35) / 「黝い血」(S42) / 「みちのく子供風土記」 / 「原生花園」(S44) / 「海の幸」(S46) / 「湯治場風土記」(S47) / 「ブルメリアの木陰に」(S49) / 「南部女人抄」(S50) / 「タンタラスの虹」(S50) / 「夜明けの河」(S54) / 「啄木の妻」(S55) / 「暮らしのつくろい手ばたらぎ」(S58) / 「万灯火」(S61) / 「南部九戸落城」(H元)

【渡辺喜恵子展】

▽北秋田市文化会館 / 平成21年10月(展示中)

- 「原生花園」三部作刊行。
- 一九七一(昭和四六)「海の幸」刊行。同作品がNHK「日曜名作座(声の出演 森繁久彌・加藤道子)」で放送される。

- 一九七二(昭和四七)「原生花園」が「アンラコロの唄」としてTBSでドラマ化される。「湯治場風土記」刊行。

- 一九七四(昭和四九)六十歳。「ブルメリアの木陰に」刊行。「海の幸」がTBSでドラマ化
- 一九七五(昭和五十)「タンタラスの虹」「南部女人抄」発行。

- 一九七六(昭和五一)「風に咲くプアマレ」刊行。
- 一九七七(昭和五二)「馬淵川」がNHK日曜名作座で放送される。

- 一九七九(昭和五四)「夜明けの河」発行。
- 一九八〇(昭和五五)「啄木の妻(上・中・下)」発行。

- 一九八一(昭和五六)「北国食べ歩き風土記」発行。
- 一九八一(昭和五七)劇団文化座が「啄木の妻」を舞台化、初演。

- 一九八三(昭和五八)「暮らしのつくろい てばたらぎ」発行。
- 一九八四(昭和五九)七十歳。秋田魁新報社に一千円を寄付、この寄付を基金の一部として

- 「さきがけ文学賞創設される。」
- 「みちのく子供風土記」の映画化が桜田淳子主演で新日本製作株式会社(代表取締役社長・島田洋州)により企画され鷹巣、合川

- などで撮影が行われたが、資金繰り悪化のため制作が中断され、まぼろしの映画となった。
- 一九八六(昭和六一)「万灯火」発行。

- 一九八七(昭和六二)「みちのく子供風土記館」建設資金として一千万円を寄付。
- 一九八九(平成元)七五歳。八月、「南部九戸落城」発行。十一月五日、みちのく子供風土記館が竣工、渡辺喜恵子文学碑が建立される。

- 一九九二(平成三)たかのす風土館(現北秋田市文化会館)が竣工、こけら落としとして、たかのす劇団、市民、劇団文化座による演劇「みちのく子供風土記」が上演される。
- 直木賞の目録及び正賞の銀時計などを鷹巣町に寄贈。

- 一九九四(平成六)十一月八日、秋田市明德館前に「タンタラスの虹」に描かれたミス・ハリソンと金子ハツの母子像「秋田の赤い靴」が建立される。
- 一九九七(平成九)八月八日、八三歳で逝去。

- 一九九八(平成十)「タンタラスの虹」を舞台化した一人芝居「足の裏の神様」(脚本:松山善三、演出:齊藤耕一)が秋田市出身の女優・浅利香津代により上演される。

- 母子像「秋田の赤い靴」(秋田市明德館前)



母子像「秋田の赤い靴」(秋田市明德館前)